

他ニ淋巴液ノ鬱滯ヲ來シテ腎臟血管ノ鬱血ヲ喚ビ而シテ細尿管ト細淋巴管トヲ交通シテ爰ニ乳糜尿ヲ發生スルモノナリ

本症ニ對スル沃度加里ノ作用ハ血液ノ粘度ヲ減シ新陳代謝作用ヲ高メ血栓及ビ栓塞ヲ除キ淋巴ノ鬱滯ヲ消散セシムルニ因ルモノト斷定セラル

曾テ長友田中博士ノ報告十例ニ就テ左側六、右側二、兩側一、兩側清澄ナル者一ナリシガ予ノ例ニ於テハ二例共ニ左側ナリシハ大ニ興味アルコト、思ヒ尙ホ研究ノ餘地ヲ存スベシ。

## ●鬼胎分娩ニ就テ

在長岡 諸橋林太郎 (學年卒業)

### 一、肉胎 Fleischmole.

卵子ノ疾病及ビ異常ノ狀態例令胎盤ニ異常アリテ胎兒ヲ養フ能ハザルモノ卵膜臍帶ノ異常ニ依リ血行障害ノトキ、胎兒ノ畸形及ビ卵子ト子宮トノ間ニ出血等ノ場合ニ依リ胎兒ノ死亡ヲ來タストキハ普通直チニ分娩ヲ來スト雖モ時トシテ永ク子宮内ニ止マリ種々ノ變化ヲ起スアリ即チ妊娠第一ヶ月ニ於テ胎兒死亡スレバ吸收セラレ卵ノ排出ニ當リ卵膜羊水ノミニシテ胎兒ハ其ノ痕跡ヲモ認メザルアリ反シ死亡後直ニ卵子排出セラレザルハ屢々卵膜内ニ出血ヲ起シ新鮮ナル血液層ヲ卵中ニ作ル爲メニ卵ハ外觀上凝血ノ一塊或ハ生肉ノ一片ノ如シ故ニ之ヲ血胎 (Butmole) 又ハ肉胎 (Fleischmole) ト稱ス今凝血又ハ肉塊ヲ切開シテ見スレバ内層即チ中心ハ滑澤ナル羊膜ニ被ハレタル腔ヲ見ル其ノ外層ハ暗赤色ヲ呈セル凝血ヲ見ルニ止

マリ胎兒ハ痕跡ヲモ認メ難シ而シテ鏡顯上新鮮ナル血液ト己ニ生ジタル肉胎トノ間ニ萎縮セル絨毛及ビ脫落膜細胞ノ遺殘ヲ見ルノミ

### 余ノ實驗例

患者 長岡市 教員 T. S 生 參拾貳年

既往症 父ハ貳拾年前「チフス」ニテ母ハ五年前腦ノ疾患ニテ死ス兄弟三人姉妹五人共ニ健全患者ハ第七子ニシテ幼時頗ル強健參才ノ時種痘八才ノ時麻疹ヲ經過シ拾貳才ノ時「チフス」ニ犯サレシモノ一ヶ月ニシテ治ス貳拾八才ノ時背部ニ「フレンケル」ヲ得タリ月華ハ拾六才ニシテ來潮シ經過不正ニシテ八日間疼痛ナシ貳拾才ノ時結婚初産貳拾四才一昨年六月第四回分娩月華ハ一年ニ二乃至三回ニシテ昨年六月拾日ヨリ八日間ニシテ終經トス

現症 昨年七月末ヨリ下腹部少々大キクナリ即チ異物ノ感及ビ冷感アリテ惡心ヲ覺ユ

八月初 嘔吐一回

九月 子宮ハ可ナリ確カニ大キクナリシ感アリ

拾月 中旬ヨリ乳汁分泌

全 貳拾五日 少許ノ白帶下アリ

全 參拾日 少許ノ赤帶下アリ疼痛ナシ

拾壹月 拾日 子宮ハ反テ少々小サクナリシ感アリ

全 貳拾日 ドクトル S 生ノ診ヲ受ク子宮底臍下三・五橫指徑

全 貳拾六日 醫士 N 生ノ診ヲ受ク

全 貳拾八日 全 Y 生ノ診ヲ受ク

全 參拾日 全 W 生ノ診ヲ受ク 何レモ確定セズ

拾貳月拾日初メ余ノ處ニ來ル目下ノ主訴

一、食慾便通正

二、歩行時呼吸困難

三、子宮出血

四、右ノ季肋下部ニ於テ輕度ノ疼痛アリ

五、尿ハ稀薄黃色ヲ呈シ僅カニ滑濁反應弱酸性蛋白ナシ

麥角浸 三・〇—一〇〇・〇 一日五回

アセチルサルチル酸 二・〇 燐古 〇・〇五 四回

拾壹日赤帶下ナシ腔洗ヲ行フ内診上肉胎?ト疑ヒ娩出ヲ試ム

拾貳日又少許ノ新鮮ナル出血アリ、蘆薈丸六粒頓用

拾參日午後三時「ヒニン」一・五ヲ參包トシテ與フ

全 午後九時可成疼痛ヲ伴ヒ出血ヲ來ス

拾時凝血排出腹部膨滿腔洗後ガーゼ栓塞

全 拾分疼痛アリ出血止マズ

全 貳拾分陣痛起リ發作一分 間歇四分

全 參拾分 發作一分參拾秒 間歇拾分

全 四拾分 石鹼浣腸 參百五拾瓦

全 五拾分 液ト共ニ硬便排出 尿排出量不定

拾壹時 腔洗後内診スルニ子宮外口二指ヲ通シ確カニ肉様ノ塊ニ

觸知セル感アリ更ニ栓塞交換子宮底ハ三・五橫指徑

拾壹時拾分 發作壹分貳拾秒 間歇貳分拾秒

全 參拾分 發作拾秒 間歇壹分

拾六時腔洗後栓塞交換子宮口參指開大愈々肉様ノ塊ニ達ス手指ヲ挿入シテ除去ス即チ新鮮ナル肉塊ヲ娩出ス

拾四日午前零時參拾分嘔吐壹回子宮内洗滌ヲ行フ

全 壹時 P. 83 R. 24 T. 36.8°

全 壹時參拾分疼痛止ム安眠ス

全 六時陣痛僅カニ來リ少量ノ出血アリ

全 八時子宮底ハ臍ト恥骨縫際トノ中間ニアリ尿排量四〇〇・〇

疼痛ナシ

拾四日、拾五日異常ナシ以下毎日壹回ノ腔洗ヲ行フ

拾六日子宮底ハ臍下四指橫至ニシテ疼痛ヲ覺エ便通ナシ

拾七日頭痛、頭重、上昇

拾八日子宮底ハ臍ト恥骨縫際トノ中間ニ位ス壓痛ナシ只少許ノ赤帶下アリ

拾九日頭痛ナシ少許ノ赤帶下子宮ハ外部ヨリ觸知シ難シ

貳拾日特記ノ症ナク良好ノ經過ニ向ヒ貳拾四日全治ス

肉塊ハ長サ四寸巾サ貳寸五分高サ一寸五分周圍六寸重量百目外部ハ暗赤色

ニシテ内部ノ腔間ハ滑澤ナリ

事已ニ舊聞ニ屬スレバ比較參考ノ爲メ茲ニ轉載ス實ニ一讀百驚ノ價值ヲ有ス

東京府下深川鶴步町二番地田中石之助妻ヲ歌 五十一ハ去ル明治十三年ノ

九月頃ヨリ月經ヲ見ズシテ惡阻ノ如ク覺ヘシ故全ク懷妊セシト思ヒ身休ヲ

大切ニシテ居リシガ十月ニモ及ビタレド更ニ產氣ナク其ノ後モ屢々腹痛ノ

セシ事ハアリシカド一向ニ生ルル様子モナク其ノ度毎ニ藥ヲ飲ミテハ今日マデ過セシ處去月廿四日ノ夕方急ニ腹痛ヲ發シケンバ夫石之助ハ西洋醫西山某ト漢方醫片桐某ノ両氏ヲ招キ治癒ヲ乞ヒタルニ阿氏立合ノ上診察シテ藥劑ヲ與フルト等シクニ歌ハ直ニ產氣ツキテ出產シタルモノハ胞衣ノ色ニテ其ノ量目一貫五百十七匁長サ一尺一寸八分周圍一尺五寸九分ノ肉塊ナリカバ兩醫モ打驚キシガ治療ノ參考ニモトテ之ヲ「アルコール」ニ漬テ備ヒ置シト但シ產婦ハ健康ナリト云フ (明治十六年九月一日報知新聞)

## 二、葡萄胎 Traubennote

本症ハ一名胞狀胎 Blasenmole ト稱シ稀有ナル疾患ニシテ其ノ發生ニ就テ一、Virchow ノ説 古ハ有カナリシモ今日ハ信ヲ置クニ足ラズ即チ脈絡膜絨毛ノ粘液組織ノ腫瘍狀増殖ト認メタリ (Myxoma fibrosum Placentae)  
二、Marchand ノ説 水腫性膨脹ヲ有スル絨毛ノ不正ナル増殖ニシテ遂ニ壊死スルモノナリ即チ絨毛結締組織ノ表層ハ古態ヲ存スルモ内部ハ液化シテ無數ノ水泡ニ變ジ其増殖機轉ハ主トシテ絨毛ノ上皮内ニ存スル「ランゲンマン」細胞層及「シンチチニウム」(sowohl Syncytium als Langhanssche Zellschicht) ニ來ル而シテ類多ノ發生セル細胞ハ時々遊離シテ床脫落膜内又ハ筋層中ニ竄入シ殆ンド新生物ニ等シキ蔓延ノ狀ヲ呈シ全脫落膜ヲ破潰スルニ至ル尙他ノ臟器 (Lunge, Scheide) ニ轉移シテ死ヲ來ス「ア」此ノ症ガ妊娠ノ初期ニ來ルハ卵ノ全面變性シ胎兒ハ死亡シテ僅カニ痕跡ヲ留ム併シ稀ニハ胞胎ト共ニ變性セザル卵子ヲ發見セル「ア」又生活胎兒ヲ二回實見ザリト Max Runge ノ記載ザル (Siehe Turnau, Centralbl. f. Gynäk. 1893, No. 41—Kehrer, Arch. f. Gynäk. Bd. 45.) 或ハ胎兒ハ全ク

崩潰シテ臍帶ノ殘痕羊膜ノ一片ヲ存スル「ア」又絨毛ノ全部水腫狀變性ノ際全子宮内容物ハ小囊胞ヲ形成シ其容積兒頭大ニ達シ數ボンドノ重量ヲ有ス此ノ胞ハ大小不定ニシテ大ナルハ葡萄位柔軟ニシテ五ニ細莖ヲ以テ連接ス胞内ニハ Mucin, Albumin ヲ含有セル水腫透明ノ液ヲ認ム輕度ナル症ハ最初脫落膜内ニ存スルモ妊娠ノ進ムニ從ヒ後ニハ翻轉及ビ眞脫落膜ニ達ス極メテ危險ナルハ破潰性鬼胎形成ナリ之ハ絨毛及ビ上皮ハ深く筋層中ニ浸入シテ漿膜ニ達シ爲ニ子宮壁甚ダ菲薄トナル此ノ場合ニアリテハ手術ノ際子宮ノ出血及ビ穿孔ヲ來スノ恐レアルヲ以テ注意スベシ

原因 未ダ一定セズ種々ノ説アリト雖初婦ヨリモ經產婦ニアリテハ此ノ變性ニ罹リ易シ又年齡ノ加ハルト共ニ素因ヲ増加スルモノノ如シ多クハ四拾年位ニシテ又高年婦人五拾五年及ビ拾五年ノ若キ婦人ニ發セシ例アリ而シテ同一婦人ニシテ反覆再發ヲ來セシ「ア」

一、Hecker ノ説 尿膜ノ原發性缺亡ニヨリ脈絡膜絨毛ノ増殖ヲ起ス

二、Tartit ノ説 梅毒ニ依リテ來ル

三、Keffler ノ説 水楊酸曹達内服ノ如ク藥物ト關係ヲ有ス

四、Dorland, Gerson ノ説 子宮ノ疾患萎黃病、月經障害

五、其ノ他ノ説 母体ノ疾患即チ心肺腎貧血

六、Die Ovariale theorie 此ハ卵性説ニシテ卵ノ原發性疾患ナリトシ早期ニ於ケル胎兒ノ死亡及ビ多クノ場合ニアリテハ卵巢ノ小囊腫性變性ヲ合併スル「

七、Die decidualtheorie 之ハ脫落膜説ニシテ子宮ノ疾患及ビ血行障害ノタメ絨毛ノ水腫性變性ヲ起スト云フニアリ即チ月經障害、多產婦ニ多ク

シテ脱落膜ニ於テ炎症ヲ証明ス

症候 一、出血、妊娠前半期ニ於テ勞動ニ關係ナク不正ノ出血ヲ來タシ併モ前置胎盤ノ場合ヨリハ屢々ニシテ (Otto Kistner) 激烈ナル血ハ直ニ卒倒シ又ハ死亡スルコアリ

二、子宮ノ大サ、子宮ハ月數ニ比シテ急速ニ膨大シ既ニ一ヶ月位ニシテ四ヶ月ノ大サニ達シ又四ヶ月位ニシテ拾ヶ月ノ大サヲ有シ即チ子宮底ノ位置ハ臍窩ニ達シ甚シキハ心窩部ニ達シ劍狀突起ヲ舉上スルコアリ

三、壓迫症狀、惡心嘔吐 (普通妊娠ニアリテハ 40% Genuel トス) 呼吸困難下腹部ニ於ケル緊滿壓重ノ感下肢ノ水腫及ビ蛋白尿ヲ見ル尿成分ノ變化ハ通常ノ妊娠ニアリテハ末期ニ於テ 3—5% ノ人ハ蛋白ヲ認ムルモノナリ分娩時ニハ一般ニ蛋白ヲ証明ス

四、貧血、數回ノ出血ニ依リ顔面蒼色、腦貧血、心悸亢進

五、觸診上、膨滿セル腹部ハ一様ニ彈力ヲ有シ各部同様ノ硬サヲ覺ユ胎兒ノ部分ハ觸知セズ故ニ胎動ナシ

六、聽診上、子宮雜音ヲ聽取スルモ胎兒ノ心音及ビ臍帶雜音ヲ聽取スルコナシ

七、內診上、子宮ノ増大下子宮部及ビ腔部ノ腫脹弛緩殊藍色時ニ腔腔ノ溫感ヲ覺知ス

診斷 以上ノ症候ニ依リ明力ナレ只之レト區別スベキハ

一、子宮外妊娠、此ノ症ニアリテハ腹腔内ニ出血シ子宮ノ前後ニ於テ腫瘍狀物ヲ形成ス (但シ胞狀胎ニアリテハ內診上子宮頸ハ腫瘍狀物ト連接セルヲ觸知スルニアリ) 而シテ內診上子宮底ノ近傍殊ニ妊娠側ニ於テ柔軟彈力

性ノ疼痛アル腫瘍ヲ觸知シ屢々偏側ノ激烈ナル發作性疼痛ヲ伴ヒ反覆シ來ルコ陣痛時ノ如シ又妊娠參ヶ月ニ於テ脱落膜ヲ排出ス

二、子宮ノ惡性腫瘍、出血多量ノタメ著シク貧血顔面蒼白ヲ來スモ又子宮ノ大サ其ノ月數ニ比シテ膨大ナルコ及ビ他ノ妊娠症候ニヨリテ鑑別ス

三、子宮孔既ニ開大後ニ於テ診スルハ此症著名ニシテ他ノ症候及ビ經過ニ依リテ確診ス

豫後 本症ハ胎兒組織ニ起原ヲ發シ後ニ母体ヲ犯シ遂ニ死ノ轉歸ヲ取ル惡性腫瘍ナリ故ニ一般ニ不良ニシテ胎兒ノ死ハ元ヨリ論ズルニ足ラズ只母体ノ死ニ至リテハ

1、Hirtzmann 13%, Dornat, Garson 18% 尙分娩時大出血ノタメ死亡スルコ決シテ鮮カラズ

2、Volkmann 破潰の肉穿形成ヲ來タス

3、Vot. Neumann ハ惡性新生物ヲ發生ス

四、Marband ハ更ニ脈絡膜上皮腫ヲ形成ス

療法 最初診斷不定ノ間ハ安靜臨床ヲ命シ清涼ニシテ暖ニ過グルコナク消化食ヲ與ヒ興奮ヲ避ケ便通ヲ整調シ經過ヲ見ルベシト雖多量ノ出血ヲ來スハ洗滌栓塞ヲ施シ麥角阿片劑ヲ投ジ已ニ一塊小片ヲ見タルハ腔及ビ宮洗後硬ク栓塞ス併シ子宮口充分ニ開大スルニモ係ラズ娩出セザルハ手指ヲ以テ双合の壓出法ヲ試ムルヲ可トス又卵膜等ノ遺殘物ニ由リ内容分解シテ惡臭發熱スレバ手指又ハキユレツテナリテ全然摘除スベシ器械ノ使用時ニ當リテハ充分ノ注意ヲ拂ハザレバ子宮壁ヲ穿通スルコアリ尙產褥時ニアリテハ嚴重ナル搔守ヲ怠ルタメ正規分娩ヨリ反テ屢々子宮ノ疾患ニ罹リ易

シ故ニ子宮ノ收縮並ビニ惡性腫瘍ノ發生等ニ注意スベシ診斷確實ナル場合ニハ子宮ノ全摘出ヲ行フヲ以テ最良トス

## 余ノ實驗例

患者 長岡市 會社員 N. T 生 貳拾六年

既往症 父ハ七年前心臓炎ニ依テ斃レ母ハ健存ス良人ハ五年前淋疾ニ犯サレシモ結婚當時已ニ全治セリト云フ日下異常ナシ兄弟二人妹一人皆健全患者ハ第三子ニシテ生來薄弱時々感冒ニ罹リ易シ二才ノ時種痘六才ノ時麻疹ヲ經過ス初經ハ六才ニシテ開キ經過四日間ニシテ少量不正疼痛ナシ併シ之レヨリ常ニ月經不正ニシテ腰部及ビ大腿ノ冷感頭痛ヲ覺ユ一昨年二月貳拾四才ニシテ結婚ス以來白帶下ヲ來タシ四月頸部淋巴腺及ビ扁桃腺ノ腫起疼痛ヲ覺ユ幸ニ藥効ニ依リテ治ス全年六月子宮内膜炎ノ診斷ノ下ニ Auskratzung, Alexander Adams Operation ヲ行ヒ術後拾六日間少量ノ赤帶下ヲ以テ治癒ス全年拾貳月無痛性尿意頻數ヲ訴フ大正貳年四月上旬妊娠七ヶ月ノ頃瀟車ニ乗ジ拾里許リノ處ニ轉居セシ結果赤帶下ヲ認メ爾來留マラルヲナク六月拾五日胎動ヲ感ゼズ全月拾九日途ニ九ヶ月早産シ胎兒ハ死亡娩出セリ尙産褥ハ無熱ニシテ赤帶下一週間ニシテ良好後經過ヲ取レリ七月ヨリ九月マデ月經ナシ拾月拾日ヨリ三日ニシテ終經ヲ認ム

現症 昨年拾貳月下旬ヨリ突然出血ヲ起シ翌壹月六日ニ至ルモ止ラズ食後惡心アリ

參年一月卅日尙出血止マズ以後數回少量ノ出血アリ

參月拾九日初診午後參時入浴時ニ當リ浴槽中ニ於テ突然大出血ヲ來シ大小便ヲ共ニ排泄ス直チニ床中ニ入レ絶對的安靜ヲ命ジタルモ人事不省大貧血

ヲ呈ス全四時脈膊觸知セズ即チ「カンフル、ヂガーレン、エルゴチン各一筒ヲ施シ全廿分脈膊細小僅カニ觸知ス全參拾分食鹽注入七〇〇・〇五時」カンフル、エルゴチン」一筒同時ニ腔洗後下腹痛ヲ伴ヒ凝血出ヅルモ胞ナシ内診スルニ子宮底ハ臍下二指横徑ニシテ一般ニ柔ク感知ス輕度ノ壓迫ニ依リ敏銳ナル激痛ヲ覺ユ子宮口ハ開大シテ二指ヲ通ジ輕ク挿入スルニ軟カキ異物ヲ感ズ卵胞ナク柔軟海綿狀ノ塊及ビ凝血ノ如シ故ニ手指ヲ以テ試験的搔卵ヲ行ヒシニ胞ノ一小部ヲ得タリ六時洗滌後硬ク栓塞セシニ七時ニ至リ全ク娩出セリ胎胞ヲ得タリ全重量六百目

貳拾日 P. 115 R. 21 T. 37.6 一般ニ貧血ヲ呈シ顔面結膜ニ於テ甚シ舌、口、唇著シク乾燥出血多量ニシテ右側顳頂部ニ於テ頭痛甚シ子宮底ハ臍下四指横徑ニ位ス

貳拾壹日 P. 105 R. 20 T. 37.2 頭痛不眠乾燥甚シ子宮底ハ一般ニ柔軟ニシテ觸知シ難シ

貳拾貳日 P. 100 R. 20 T. 37.5 頭痛及ビ少量ノ出血下腹部膨滿ヲ訴フ腹痛ナシ

貳拾三日 P. 90 R. 20 T. 37.2 頭痛少許ノ腹痛舌口唇ノ乾燥洗滌後排便少量

貳拾四日 P. 88 R. 20 T. 37.9 頭痛輕快顔面口唇稍々紅色ヲ呈ス少許ノ赤帶下アリ食慾不振

貳拾五日 P. 85 R. 20 T. 36.5 安眠談話ニ差支ナシ腹痛亦帶下ナシ

貳拾六日 異常ナシ參拾日殆ンド全治ノ形態ニテ以後良好ノ經過ヲ取レリ

處方 内服ニハ主トシテ麥角劑ヲ用キ貧血ニ對シ鐵劑肝油ヲ與ヘ頭痛ニハ

「ミグレン」二〇チ四包トシテ持續ス腹部ノ疼痛ニハクレーデ氏可溶性銀塗布及ビ氷嚢ヲ貼用ス

## 通信

### ●松崎清博氏通信

(大正二年卒業。十全會宛)

(前畧)小生儀先般都合に依り左記に轉任仕り候當院は一種の施察病院にして患者の自由に接し練習するの機會有之候只患者比較的多く、中には研究の價值あるものも多からむも凡骨の悲さにて看過するを遺憾に存じ候目下京大に荒木先生醫化學松浦先生の花柳病講義有之毎金曜午後出席致し其他餘暇には全院に出掛け他教授のクリニックを聴き居り候當地には同期卒業生少く中野靈吉君は京大質屋内科に研究致し居られしが本月五日より日吉病院(當市立傳染病院)醫員拜命せられ田原利崇君は卒業後播州明石病院にて研究し居られしも今夏脚氣の爲め當地なる郷家に歸り居られ候、下川外史君軍醫生として伏見聯隊に入られしも痔疾の爲め兵役免除となり市内神服病院に勤務せられしが八月末都合に依り西ノ宮同生病院へ轉任いたされ候先は亂筆を以て近況迄如斯に御座候頓首

京都市八條通濟世病院

十月十五日

松崎清博

### ●鈴木寛之助氏通信

(明治二十九年卒業。海軍軍醫中監。獨英國留學)

鈴木氏は本校出身の秀才なるが歐洲戰亂時に獨逸にあり國交斷絶によりて難を英國倫敦にさげ目下全地に止りて研學を持續せらるゝことなれり深く全氏の健康と武運とを祈る。

拜啓小生事去八月十五日伯林を退去仕り十九日無事當倫敦に到着仕候今般獨逸國駐在を免ぜられ更に英國に駐在を命ぜられ當分當地に在りて研究し傍ら海戰の創傷を實驗し且つ其他の職務上の知見を得るの好機に接するを得ること相成申候諸先生へ宜敷御鳳聲被下度候

九月一日

英京倫敦にて

鈴木寛之助

28 Regent's Park Road,

London N. W.

## 雜報

### ●金澤病院集談會 (演說抄錄)

顔面播種狀狼瘡、廣大ナル乳嘴腫、及兩側睪丸護膜腫ノ三患者説明并ニ其蠟製摸型(金澤皮膚科製)供覽

土肥章司

一、顔面播種狀粟粒樣狼瘡

本病ハ極メテ稀有ノ疾病ニシテ本邦ニ於テハ未タ其實驗例ヲ聞カズ、余